

Title	1917-1930年のソヴィエト農村における社会的改造の対象としての子ども： 児童学的調査の資料によって
Sub Title	Children as a subject of social transformation in rural Soviet in 1917-1930s on the basis of the data of the pedagogical survey
Author	Dimoni, Tat'iana(Asaoka, Zenji) 浅岡, 善治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2018
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.111, No.3 (2018. 10) ,p.291(77)- 308(94)
JaLC DOI	10.14991/001.20181001-0077
Abstract	<p>ソ連の最初の10年において新たなイデオロギーの影響下に形成された、農民の子どもたちの世界観についての研究である。1910-1917年に生まれた農民の子どもたちは新しい価値観を習得したが、なおも心の中に基本的な「農民的祖型」を保持しており、それは、「土地と自由」という旧き理想に基づいていた。概念と価値観とのそのような結び付きは、1930-1940年代のソヴィエト人民の世界観の根源的な部分となったのである。</p> <p>The article deals with the study of peasant children's world view that was formed under the influence of the new ideology in the first decade of the Soviet Union. The source of the analyses is the data of the pedagogical survey conducted by N. A. Rybnikov, A. M. Gel'mont, V. N. Shul'gin, etc. in the second half of 1920s. The author provides a consistent analysis of the peasant children's views on the changes in property relations, land laws, tax immunity, legal relationship (voting right, democratic norms of self-government), everyday life, children ideals. The author concludes that the peasant children, who were born in 1910-1917, acquired new values, yet kept the basic peasants' archetypes in their mind. The peasant children's world view was based on 'Land and Liberty' ideals. That combination of conceptions and values became a fundamental foundation for the Soviet people's world views in 1930s-1940s.</p>
Notes	特集：20世紀のソヴェト農民と農村社会
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20181001-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1917–1930 年のソヴェト農村における 社会的改造の対象としての子ども

——児童学的調査の資料によって——

タチヤナ・デイモーニ*

浅岡善治 (訳)**

Children as a Subject of Social Transformation in Rural Soviet in 1917–1930s on the Basis of the Data of the Pedagogical Survey

Tat'iana Dimoni*

Translated by Zenji Asaoka**

Abstract: The article deals with the study of peasant children's world view that was formed under the influence of the new ideology in the first decade of the Soviet Union. The source of the analyses is the data of the pedagogical survey conducted by N.A. Rybnikov, A.M. Gel'mont, V.N. Shul'gin, etc. in the second half of 1920s. The author provides a consistent analysis of the peasant children's views on the changes in property relations, land laws, tax immunity, legal relationship (voting right, democratic norms of self-government), everyday life, children ideals. The author concludes that the peasant children, who were born in 1910–1917, acquired new values, yet kept the basic peasants' archetypes in their mind. The peasant children's world view was based on 'Land and Liberty' ideals. That combination of conceptions and values became a fundamental foundation for the Soviet people's world views in 1930s–1940s.

Key words: Russia, the Soviet period, ideology, social transformation

JEL Classifications: N54, I21, Q10

* ヴォログダ大学歴史学部
Faculty of History, Vologda University

** 東北大学大学院文学研究科
Graduate School/Faculty of Arts and Letters, Tohoku University

ソヴィエト・ロシアにおける1917-1930年の時期は、ソヴィエト社会の市民の基本的諸特徴に適合的な、「新しい」人間のモデル創造の大規模な試みがなされた時代であった。そのような人間類型の理想は、党の政治的文書や大衆的な情報宣伝手段（ラジオ、新聞）、文学作品、そして映画のような新たな芸術の中で形を与えられた。概して、「新しい」人間の基本的諸特徴となるべきは、階級意識、「旧来の、ブルジョア的」社会に対する非妥協性、政治的活動性、社会の自主的管理への参加、民主主義（民族的・ジェンダー的同権への志向）、教育への志向、無神論などであった。⁽¹⁾

ポリシェヴィキ政権の指導者たちの考えるところでは、「新しい」人格の創造過程における基本的な役割は教育（образование）に帰せられていた。ここでは教育は、なにがしかの社会的意義のある総体的知識の習得としてだけでなく、共産主義的な思考様式を持つ人間を育成することとみなされた。格別の役割を与えられたのは、1917年の革命のほぼ直後に、新しい原理による大規模な改変を被っていた初等・中等教育機関（школа）であった。1918年9月30日、全ロシア中央執行委員会は、学校活動の仔細を定めた「ロシア共和国統合労働学校についての規定」を承認した。統合労働学校は2つの等級に分けられた。すなわち8歳から12歳までの子ども向けの第1等級（4学年制）と、12歳から17歳までの第2等級（5学年制）である。⁽²⁾

就学は、学齢期にある全ての子どもにとって義務的なものとされた。学習は共学であった（少年と少女が共に学んだ）。授業の中で何らかの宗教的教理を教えることは禁じられた。学校生活の基礎に据えられるべきは生産的労働であって、それが学習と緊密に結びついていた（教育における総合技術教育（политехнизм）の原則）。

年間の授業は次のように区分された。9月1日から6月1日までの通常授業、6月1日から7月1日までの野外での（子どもを自然や実生活などに親しませるためのエクスカージョン形態での）授業、7月1日から9月1日、12月23日から1月7日、4月1日から14日は完全休暇（すなわち授業から解放される時期）であった。県国民教育部には、地方的条件や必要を考慮して、年間の授業配分を見直したり、休暇の期間を短縮したりする権限が与えられていた。子どもは週に7日学校で学ぶが、1日は授業から解放され（読書やエクスカージョン、観劇などに活用された）、もう1日は「半ドン」で、実験やレポートの作成、学校での集会などにあてられた。⁽³⁾

(1) これらの問題については数多くの文献が存在している。Программа ВКП (б) 1919 г., Гольцман А. Реорганизация человека. М., 1924; Гастев А. Новая культурная установка. М., 1923; Керженцев П. М. К новой культуре. Петербург, 1921; Крупская Н. К. О коммунистическом воспитании школьников. М., 1987; Луначарский А. В. Задачи просвещения в системе советского строительства. Доклад на I Всесоюзном Учительском съезде. М., 1925; Красовицкая Т. Ю. Российское образование между реформаторством и революционаризмом. Февраль 1917-1920 год. М., 2002 и др.

(2) Устав единой трудовой школы // Известия ВЦИК. 1923. 28 февраля. № 296.

(3) Декрет ВЦИК о Единой трудовой школе РСФСР // Известия ВЦИК. 1918. 16 октября. № 225.

人間の新たな社会的理想の形成において、成育期にある若年層の教育は特に重要だった——これらの児童は第1等級の学校で教育を受けた。教育学者・心理学者の意見によれば、8-12歳の年齢で通例子どもの（思考、想像、記憶といった）認識過程が発達し、さらに人的個性（興味関心や性格上の諸特性）は既に形成されている。従って、初等・中等学齢にある若年者は新しいこと全てに敏感で、それらに関心をもってあたり、学習環境や課外活動に参入しようとするのである。同時に1920年代の教育学者たちは、学齢にある若年者の基本的な活動形態は遊びであるとしており、ゆえに学習過程を整えつつ、役割的契機を考慮することが不可欠であった。

農村の子どもにとっての人格的発展の最重要の刺激は、学校に行くこと、教育を受けることだった。知への欲求は既に19世紀後半から農民の中には生まれていた。1897年のロシア最初の国勢調査（1億880万人の農村住民を捕捉）のデータによれば、読み書きのできる農民はロシアの全農村住民の17パーセントだった。女性の識字率は男性より低く、その2.6分の1ほどだった（読み書きのできる男性は25.2パーセント、女性は9.8パーセント）。10-19歳の住民の識字率は29.1パーセントだった。識字の水準は20世紀初頭に著しく向上した。ヨーロッパ・ロシア12県（中央・北西部分）の平均では、1908-1913年の識字率は全農村住民の24-25パーセントだったが、個々の県についてはこの指標は14.8パーセント（ペンザ県）から41.7パーセント（モスクワ県）までの揺らぎがあった。⁽⁴⁾

既にツァーリ政府も、教育が経済的変革の主導的な構成要素たるべきことを認識していた。とは言え、教育の問題において農村住民は、教育を受けたとしてもその知識を現実に活用できるかどうかについてディレンマに直面していた。19世紀末-20世紀初頭のロシアの社会経済システムの諸矛盾の抑圧的なもつれ合いの中では、読み書きのできる農民は、自営に対する利点というよりはむしろ負担であった。⁽⁵⁾

教育の不可欠性について、事態は1920年代末までに大きく変化した。急激に近代化を遂げつつあるロシア経済は多くの労働力を必要とし、農民にとって、読み書き・計算の最低限の知識を獲得することなくしての農村から都市への出立はほとんど不可能となった。それゆえ、子どもや成人が学校（後者の場合は識字教習所（ликбез））に通うことは、国家の明確なスタンスとは別に、合理的な農民的思惟と既に矛盾しなくなっていたのである。

1926年の住民センサスによれば、ロシア（当時はロシア共和国）における16-50歳の識字率は全住民の58パーセントで、1930年にはこれが67パーセントになった。⁽⁶⁾ 子どもの恒常的就学率がど

(4) Рашин А.Г. Население России за 100 лет (1813-1913). Статистические очерки. М., 1956. С. 285-295.

(5) これについては以下を参照。Гумп Э. Образование и грамотность в глубине России. Воронежская губерния 1885-1897 гг. // Менталитет и аграрное развитие России (19-20 вв.). М., 1996. С. 306-320.

(6) Народное хозяйство СССР. Стат. справочник. М., Л., 1932. С. 506.

のくらいかを明言するのは、とりわけ農村地域ではかなり難しいが、統計は学校とそこで学ぶ者の数の増大を証言している。例えば、ロシアでは1927/28年度に第1等級の学校が500万人以上を受け入れ、1928/29年度には600万人以上、1929/30年度には700万人以上、1930/31年度には960万人を受け入れていた⁽⁷⁾。1929年に「2万5千人隊」に教師として加わり、プスコフの農村に出向いた私の祖母、タチアナ・フョードロヴナ・ナザーロヴァ（旧姓レオニードヴァ）の回想によれば、村できちんと授業に出席していないのは1人だけで、他の子どもたちはごくたまに農作業の手伝いのために家に残るだけだったという。

まさに学校とそこでの教育を通じて、ソヴィエト・ロシアにおいて、新しい国家体制と新しいイデオロギーに忠実な子どもの社会的理想像の形成が企てられた。既に1919年にロシアでは国家学術評議会（ГУС）が創設され、諸学校のための義務教育カリキュラムの作成を指導した。ГУСのカリキュラムによって、学校での学習・教育活動の全内容に、世界の革命的変革の理念を「貫徹させる（пронизать）」という任務が提起された。この課題を解決する基本的方法として、カリキュラムにおいては、学校と実生活との、労働者・農民の勤労・闘争との提携が想定されていた。

1923/24年度にロシア共和国教育人民委員部によって学校向けの義務教育カリキュラムが刊行された。1917年から1920年代は教育も含めての試行期間であった。それゆえ、この時期の学校カリキュラムは、教材が個々の科目ごとに区分されていないことを特徴としていた。学校で習得されるべき知識の総体は、自然、労働、および人間社会についての情報の統合的複合体の形で与えられていたのである。これらのカリキュラムは、^{コムプレクсни}総合的なものと呼ばれた。カリキュラムの解説では、それらが学習、受け取られた知識と、実践、当地の実生活、自然の季節的現象との結合を目指していることが説明された。これに関して、大きな意義が付与されたのがエクスカージョン、生徒による天候や自然現象、農作業の直接の観察、農民経営をよく知ることであった。時季を考慮した郷土誌的資料によって、複合的なテーマが教授された⁽⁸⁾。

1925–1926年の学校カリキュラムの1つ、ヨーロッパ・ロシア北部に位置したセヴェロ・ドヴィンスク県のカリキュラムを利用して、学校での学習と社会政治教育がどのように組み立てられていたかを見てみよう。カリキュラムの冒頭には、セヴェロ・ドヴィンスク県国民教育部（губоно）教授法ビュローが「地方的内容で……カリキュラムを充実させ、我が地方現存の状況でそれを遂行する手法を細かく検討し、……カリキュラムの骨子に郷土誌的素材で活力ある肉付けすること」を課題として提起した、とある。教授法ビュローは、学校を「地域住民の実生活の再現（эхо жизни местного населения）」と呼んだ。それは、「経済・政治の諸契機の有り様を捉え、若い市民、学生を通じて、

(7) Там же. С. 509.

(8) Ракунов В. А. Государственная политика в сфере школьного образования в 1920–30-х годах // Информационный гуманитарный портал «Знание. Понимание. Умение». — 2011. — № 1 (январь-февраль).

また農村における学校の社会的・政治的活動によって直接、それらを地方住民に整えられた形で再び供するために、ソヴィエト的・唯物論的角度から反映・解釈すべき」であった⁽⁹⁾。まさにこのようにして、当カリキュラムに則って学校における学習の最初の数か月（学習初年度、第1等級学校9-12月）の授業が組み立てられた。まず子どもたちは知り合いとなり、自分のこと、家族のこと、この夏にしたこと、おもちゃについて話した。この時、ついでに（例えば、家族の数を）数え、絵を描き、短文を書くことを学ぶ。それから全員で森へ出かけ、村々を見学し、葉っぱや松ぼっくりを集めた。そして天候について、疾病について、衛生について、^{ブロック}「班」ごとに教師と話し合った。これら全ては、読み書き・計算と結び付けられた。さらに収穫について、畑について、納屋についてなどの話し合いが続いた。このようにして、ついに11月には、子どもたちは「十月革命」というテーマに行き着いた。当該テーマの学習過程において教師は、「農民の境遇が近年いかに変化したか（出発点として、当該地域で最も実感できる革命の諸効用、例えば、土地、とりわけ採草地の「地主」からの移転、折半小作人（половники）の消滅、郷における諸手続きの変更、農村の文化・啓蒙活動における新機軸などを活用することが推奨された）」について子どもたちと話し合うよう推奨された。それから教師は、労農権力について説明し、それがいつ、何年前の何月に設立されたかを話すべきとされた。全ての生徒は、なぜ革命が十月のそれと称されるのか考えるべきであった。さらに、子どもたちが年長者（とりわけ旧軍の兵士や赤軍兵士）から革命について聞いた内容を語ることが計画されていた。検討の過程で、子どもたちは11月7日と8日を祝うことを決め、学校を赤い資材で飾り立て、詩歌を習得することになっていた。また子どもたちは、レーニンの名前の入ったポスター、「ソ連邦の^{エンブレム}標章」（鎌と槌）を準備し、パレードのやり方も学ぶべきであった。これら全てに、農村に対する思いやりのある態度の必要性についての教師の説明、自然の観察、計算（パレードは3列か4列か）が付随し、活動のイデオロギー的半面は極めて内在的で（органичной）しつこくないように（ненавязчивой）なっていた。ほぼ同じような調子で、さらに2つの政治的なテーマについての活動——1月21日（レーニンの命日）と5月1日（労働者の国際的連帯の日）に向けての準備作業が進められた。このようにして、3か月ごとに子どもたちは鍵となる政治的出来事を与えられ、その周囲に大きな政治的、教育的、育成的活動が配置されたのである。

当然持ち上がるのが、児童の個性と理想の形成における変化の諸帰結が計測可能なのかという問題である。この方面の活動でこの上なく重要な仕事を行ったのが、教育学・心理学系統の学者の一大グループである。彼らは、児童学（педология）と呼ばれる学問分野で活動した。

児童学とは教育学の一潮流で、子どもの発達を促す方法の模索のために様々な科学（医学、生物学、心理学、教育学など）の統合的なアプローチを図ることを目的とする。児童学の起源は、20世紀

(9) Новые программы 1,2,3 и 4 годов обучения школ 1 ступени. Великий Устюг, 1925. С.5.

初頭のアメリカの研究者たち（G・S・ホール、J・ボールドウィン、E・メイマンなど）とされている。ほぼ時を同じくして、ロシアにおける児童学的研究も始まった。学問分野および社会運動としての児童学が特に盛り上がったのは、1917年の革命後、ボリシェヴィキ政権の支援下、ソ連においてであり、1920年代には人気はピークにあった。学校では心理学的テストやアンケート調査が積極的に導入され、国内には児童学の研究機関が設立された。しかし、1930年代初頭までに児童学的手法は権力から多くの叱責を受けるようになった。才能ある子どもたちの中に農民や労働者出身の者があまり入っていないと、児童学研究者は、生徒の「階級的に誤った」ランク付け（ранжирование）を批判された。これら全ては、児童学的実験手法の転換（сворачивание）を引き起こした。1936年には党中央委員会決定「教育人民委員部のシステムにおける児童学的歪みについて」が採択されたが、事実上それは自律的な学問分野としての児童学を清算するものであった。⁽¹⁰⁾

それにもかかわらず、世紀の3分の1にわたる熱心な活動によってロシアの児童学者は学校教育、学習、幼年期、子ども集団の研究に対して非常に多くのことをなし、今日、歴史家にとってとりわけ興味深い、様々な変数パラメータによる心理学的・教育学的測定を行った。と言うのは、ある歴史的な一時期における人的個性のような重要なカテゴリーについて、歴史家は相対的にわずかのことしか知らないからである。この場合重要なのは、同時代的に信頼のおける資料、すなわち法令文書、国家・政治指導者の著作、文学作品、手紙、民間伝承・社会学的調査・民俗学的調査の資料、視覚的資料などである。同時代的信ぴょう性が重要なのは、そのような史料は時代を最も正確に反映しているが、より後の時代の資料（例えば、口述を含む回想）は、とりわけ大衆の情報伝達手段の発展や文献の氾濫、過去の過大評価を行う政治家の発言などと関連して、先行する時代の社会像を歪んだ形で描き出しかねないことから来ている。そのような同時代的に信ぴょう性が高い史料の1つが、児童学者や教師が学校で行ったアンケート調査とそれらを加工した資料であった。

ロシアの児童学は、綺羅星のごとき輝かしい研究者の一团を育て上げた。その中には、B・H・シューリギン、M・C・ベルンシテイン、A・M・ゲリモント、C・M・リヴェスらがいる。そのうち、農村児童研究に関する主要な児童学的専門家の1人が、ニコライ・アレクサンドロヴィチ・リュブニコフ（1880-1961年）であった。彼はモスクワ大学の卒業生で、歴史学部で学び、そこで心理学に没頭した。1912年からリュブニコフは精神神経学研究所で働き始めた。リュブニコフの主たる学問的関心対象となったのは子どもだった。1913年からこの研究者は農村児童の理想についての論文を積極的に公表し、幼児の発達における社会的環境の役割について研究し始めた。1917年以降は、彼の興味を引く多くの他のテーマと共に、幼児研究が主たる学問的関心の1つとなった。伝記的手法や子どもの日記、子どもの絵、学齢期の子どもについての大量のアンケート資料を援用して、リュ

(10) Постановление ЦК ВКП (б) «О педологических извращениях в системе Наркомпроса» // Правда. 1936. 5 июля.

ブニコフは、他の研究者と共に、若年者の発達のダイナミズムやソヴィエト権力の最初の10年におけるその理想についての興味深い観察を行った。

大規模に実施された児童学的調査とその結果のおかげで、現代の歴史家たちは、社会政治的・経済的転換の影響下に生じた子どもの意識の変化について判定することができる。20世紀の初めの3分の1の時期、当該調査の方式はほとんど変わらなかった。そのことは我々に、長期的な時間軸をもって当該調査の比較を行う可能性を与えている。

計測と比較の出発点としては、第一次世界大戦前の1913年のものを選択しよう。例えば、リャザン県ゼムストヴォ初等農村学校の教師ゴリツインの質問に対する子どもたちの回答の中において、社会的な理想がいかに描かれたかである。子どもたちは、大人になったら何になるつもりか、誰のようになりたいか、何を読むのが好きで、誰を立派な人物とみなしているか、等々を質問された。生徒の大部分は、将来農民(земледельцы)になるつもりだと答えた。なりたい理想像としては、絶対的多数の子どもが教師を挙げたが、幾人かは父親や両親を挙げ、ピョートル大帝やアレクサンドル1世、スヴァトスラフ公、将校(офицер)、下士官(старшина)、また単に「頭が良くて立派な人に」という回答もあった。読者としての子どもの関心は、おとぎ話、動物物語、戦争物語、農業に関する本に集まっていた。本の中に出てくる好きな英雄としては、イリヤ・ムローメツやイェルマークが挙げられた。また最後に、「誰を立派な人物とみなしているか」という質問については、生徒の大部分が教師と答えたが、その他、司祭や上級生、親族や隣人の名前が挙げた⁽¹¹⁾。このように、革命前の農村の子どもの社会的理想は、農民的な世界観・世界意識に合致していた。子どもの視野はさほど広くなく、専ら自村内の世界、家族、基本的な家族での仕事——農業労働に集中していた。子どもの理想において教師がかなり大きな位置を占めていたが、それは、農民の中で「読み書きができる者」に対する敬意が形成されていたことの典型的事例でもある。同時に理想の中には、農民の「ナイーブな君主主義的」気分の典型であるツァーリ個人や、中世ロシアの公までもの敬意が存在していた。

1920年代の児童学的調査の資料は、農村児童の社会経済的観念と政治的理想の^{エヴォリュューティブ}進化を提示してくれる。1920年代末の農村児童のイデオロギ的観念についての調査の記述は、数多くの出版物によって与えられている⁽¹²⁾。調査はかなり大規模に実施された。つまり、1920年代末の児童学的アンケート調査には12万人の若年者が参加し、質問に対し150万件の回答を与えた⁽¹³⁾。調査の対象

(11) Голицын. Результаты анкеты о детских идеалах учеников второй группы начальной земской сельской школы Рязанской губернии // Вестник Рязанского губернского земства. 1913. № 7–8.

(12) Дети и Октябрьская революция. Идеология советского школьника / под ред. В.Н. Шульгина. М., 1928; Рыбников Н.А. Идеология советского школьника // Педология. 1928. № 1; Рыбников Н.А. Крестьянский ребенок. Очерки по педологии крестьянского ребенка. М., 1930 и др.

となったのは、次の諸州・諸県の第1等級・第2等級の学校の就学者たちである。すなわち、アストラハン州、極東共和国、ダゲスタン共和国、北カフカース地方^{フライ}、コストロマ、モスクワ、ニジェゴロド、オレンブルク、オリョール、プスコフ、サラトフ、サマラの諸州、シベリア地方^{フライ}、タムボフ、トヴェリ、トゥーラ、ウラルの諸州、ウクライナ共和国、チュバシ共和国、そしてヤロスラヴリ州である⁽¹⁴⁾。調査には、都市の児童も農村の児童も参加した（おおよそ都市の学生が66パーセント、農村の学生が33パーセントである）。質問を受けた農村の子どもは、かなり大きな村落の住民であった。質問を受けた者の大部分は、第1等級の学校の児童からなっていた⁽¹⁵⁾。調査の形式は、実際の出来事についての設問に子どもたちが書面で回答するというものだった。設問のテーマは多様だった。例えば、若年者の政治的傾向を問うに当たって、次のような問いが設定された。十月革命への態度について、ソヴィエト権力への、ソヴィエト建設への態度について、ソ連邦と他の国々との関係について、家族内の関係について、労働への、学校への態度について、労働者と農民の関係について、宗教への態度について⁽¹⁶⁾。

「子どもの意識におけるソヴィエト権力と農民」をテーマとして1927年に実施された農村の子ども向けアンケートの回答数は6085である。質問に答えた子どもの約3分の2が都市住民（3966名）で、3分の1が農村の子ども（2079名）だった⁽¹⁷⁾。

児童学者は、農村の子どもの率直さの程度について語りつつ、回答に際して農村の児童が、言葉の上でより「豊かな」反応を示したと認めた。都市の児童は個々の設問に対して平均1.6の回答を与えたが、農村の若年者は2.2なのであった。このことを研究者は、一定の社会生活環境にある子どもたちに対する設問の親近性の程度、すなわち農村の若年者は自身の周囲の出来事についてより強い関心を持っていることから説明した⁽¹⁸⁾。

アンケート内容の整理の結果、児童学者は、農村児童の社会的・政治的特徴である重要な諸点を明らかにした。とりわけ、Н・А・ルィブニコフは、農民の若年者たちは政治的な性格を持つ諸事象を十分に理解できており、これらの問題の中に大きな（「燃えるような（жгучий）」）関心を見出している、と結論した。

政治意識の高さの主たる基準として児童学者たちによって用いられているのは、もちろん新たな

(13) Рыбников Н.А. Крестьянский ребенок. Очерки по педологии крестьянского ребенка.

(14) Рыбников Н.А. Наша работа по изучению идеологии современного школьника // Дети и Октябрьская революция… С. 20

(15) Там же.

(16) Наши работы по изучению идеологии современного школьника (цель, объем и метод работы) // Дети и Октябрьская революция… С. 12..

(17) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция …С. 95.

(18) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция …С. 97.

ソヴィエト史の出発点——十月革命についての考えである。しかしながら、同じ研究者たちが、若年者たちは歴史的な展望を知的に把握しておらず、革命の原動力についての理解を欠いている、と指摘している。多くの場合、農村の子どもたちは十月革命と二月革命の区別ができておらず、十月革命が帝政^{ツァーリズム}を打倒したと考えていた。革命の主要な原因として若年者たちは何よりもまず階級的抑圧を挙げるのだが、ルィブニコフが欠陥として指摘するように、ここでボリシェヴィキ党の役割を挙げるのは非常にわずかの者だけであった。⁽¹⁹⁾

ルィブニコフが認めるように、農村の若年者の世界像の特徴は、アンケートの設問への回答の中で経済的な主題が大きな役割を占めていることであつた。⁽²⁰⁾ 基本的にこのような判断は、「ソヴィエト権力の下で、農民はより良い生活を送っているか」という設問への回答において得られた。このことについて記したのは、児童学的な分析を行った、M・C・ベルンシテインである。彼は、農村の子どもの研究を行った際に、「我々はここで農民の子どもたちの知的特性と関心の指向性について関わりを持っているが、概してそれらは、経済的領域の諸事象に注意が向きがちと言える」と指摘した。さらにベルンシテインは、農民の子どもたちの回答の中に、次のような興味深い細目^{ディテール}を見出した。「実際、農民の子どもたちは、労働者が経済的に獲得したものが、農民が経済的に獲得したものより大きく、より意義があり、数的にも多いと考えている」⁽²¹⁾。この研究者の意見によれば、ここにプロレタリアの労働時間の長さ——いわゆる8時間労働について農民児童の理解を得るべき余地が存在した⁽²²⁾。春・秋期、とりわけ「農繁期」における農民の長い労働時間に比べ、8時間労働日ははるかに短いものを感じられ、そのことが農村の少年少女の「羨望(зависть)」を生み出したのである。

児童学者は、ソヴィエト権力への態度についての設問に対する農民の子どもの回答から主要な4つのテーマを仮説的に抽出した。回答において第1の場所を占めるのは、土地について論じたものであつた(典型的な発言は次のようなものであつた。「かつて土地は地主のものだったが、今では農民のものだ」、「農民には土地に対する権利と権限^{ヴラースチ}が与えられた」、「彼は土地の主だ」、「彼ら自身が土地を管理している」)⁽²³⁾。農村におけるソヴィエト権力の主要な活動実績として、何よりもまず「土地について」

(19) Рыбников Н.А. Деревенский ребенок. Очерки по педологии крестьянского ребенка. М., 1930. С. 60.

(20) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция … С. 101.

(21) Бернштейн М.С. Что дала советская власть рабочему классу // Дети и Октябрьская революция … С. 33.

(22) Бернштейн М.С. Что дала советская власть рабочему классу // Дети и Октябрьская революция … С. 29.

(23) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция … С. 101–102.

回答したのは、質問を受けた子どもたちの54パーセントであった。⁽²⁴⁾ 8-10歳のかなり幼い子どもですら、農村におけるソヴィエト権力の主要な活動事例として土地について語った。問題に関して説明した児童の年齢が上がるほど、土地についての発言の中でより突っ込んだ扱いがなされた。⁽²⁵⁾ 総じて、農民の若年者の関心の中心に「土地」というテーマがあるということは、全くもって当然と言える。土地は農村における主要な生産要素であっただけでなく、農業的な社会における主要な財産であり、平等な土地利用に基づく公正な社会の建設を夢見る農民にとっての主たる願望そのものだった。しかしながら、子どもの理解は重要なことを考慮していなかった——土地は農民に引き渡されたのではなく、国家のものであった。1920年代、いわゆるロシア農村における「農村共同体の復活」の時期にはこのことはそれほどはっきり感じられなかったが、1930年代にコルホーズ農民は、土地の国有という現実の意味を余すところなく身をもって知ることになった。児童学者も、農民による土地の獲得に関する子どもたちの回答が、しばしば文字通りの意味で理解されていることを指摘した。学校関連活動法科学・教育学研究所（Научно-педагогический институт методов школьной работы）の児童学者たちによる特別のテスト調査は、圧倒的多数の子どもたちが、ソ連邦の土地は農民のものであると実際に考えていることを確認した。児童学者たちの意見によれば、こうした観念の醸成に少なからぬ役割を為したのは、「十月」に先んじて共産党によって提起されたスローガン、すなわち「土地は農民へ」、「工場は労働者へ」であった。⁽²⁶⁾

農村におけるソヴィエト権力の役割について話を続けつつ、その活動成果として、農村の若年者たちはかなり頻繁に農業の改善について言及した（「ソヴィエト権力は農業の向上に努めている」、「ソヴィエト権力は、自らの経営を改善する完全な可能性を農民の手に与えた」、「零落させるのではなく、彼らの経営の支援に努めている」⁽²⁷⁾）。農村におけるソヴィエト権力の役割に関する設問の回答において、20パーセントの農村の子どもがこのことについて語った。⁽²⁸⁾ 子どもの年齢が上がるほど、このことについてより頻繁に語るようになったが、ソヴィエト権力の租税政策についても同様である。租税の問題について子どもたちは、きわめて頻繁に「古き時代（старое время）」との比較を利用した。「かつては租税が重くのしかかっていた」、「以前彼らは様々な公課（подати）に苦しめられていたが、今はわずかな租税だけだ」、「ソヴィエト権力は、かつてのような公課を彼らからふんだくってはい

(24) Бернштейн М.С. Что дала советская власть рабочему классу // Дети и Октябрьская революция… С. 59.

(25) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция… С. 105–106.

(26) Бернштейн М.С. Что дала советская власть рабочему классу // Дети и Октябрьская революция… С. 27.

(27) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция… С. 109.

(28) Рыбников Н.А. Крестьянский ребенок. Очерки по педологии крестьянского ребенка… С. 59.

ない]、「かつて農民は現物で税を取られたが、今は現金でだ」、「かつては現物で取られた。やってきて荷馬車ごと持ち去り、家畜も持って行かれた」、「土地の買い戻し金を取るのではなくて、わずかな租税だけだ」、「我々からは国の租税が持って行かれるが、残りは売ることができる」、「ソヴィエト権力は頭割りの税（*подушные налоги*）を廃止した」、「ソヴィエト権力の下では、農民は単一農業税だけを支払っている⁽²⁹⁾」。このように、子どもたちは、農戸の経営に関する諸事について非常に良く通じていることがわかる。同時に回答の中では、農民が租税については「よりひどい状況にあった」時期のことがはっきり指摘されていないことがわかるが、おそらくそうした回答の一部は1921年以前の時代、すなわちネップがまだ導入されていない時期に帰されるのだろう。

農民の子どものもう1つの回答カテゴリーは、「(都市と農村との)商品交換の領域におけるソヴィエト権力の経済政策の農民にとっての意義と利点」に注目したものである⁽³⁰⁾。子どもたちは、「結合^{スムイチカ}」が実現される諸形式について記述した。「全てがより廉価になった」。「買うものが全て安くなった」、「店ででの価格が下がり、奢侈品が高くなって、穀物価格が上がった。これも農民にとっては良いことだ⁽³¹⁾」。「結合」という主題^{モチーフ}の最も明確な表現は、都市と農村の間の交換という契機を強調する発言の中に見られた。「農村は都市と結合して商品を交換し、農民は穀物を与え、労働者はトラクターを与える」、「穀物は生産用具と交換される」、「都市と農村との結合があるがゆえに、全ての用具は都市から受け取られ、そこに向かって穀物が搬出される⁽³²⁾」。総じて児童学者たちは、子どもたちの発言の中に都市に対する農村の敵対という主題を認めなかった。

同時に農村の子どもたちは、経済的性格のかなり重層的な願望をも吐露しており、それもまた児童学者たちの研究によって記録された。これらの記述を分析して、H・A・ルイブニコフは、若年者たちは商品価格の引き下げの望ましさ（質問を受けた農民の子どもの8パーセントが言及）、および農民に対する租税の引き下げ（同7パーセント）、生活状況の改善（同1パーセント）、農産物価格の引き上げ（同約2パーセント）、学費の免除（同1パーセント）、などの不可欠性について指摘したとしている。若年者たちは、農業分野における諸問題についても発言した——彼らは三圃制の一掃（同2パーセント）、農業の改良（同1パーセント）をも提言したのである⁽³³⁾。

子どもの回答の相当大きな部分が、ソヴィエト権力の確立と関連した農民の政治的・権利的状況の

(29) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция ... С. 117.

(30) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция ... С. 101.

(31) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция ... С. 119.

(32) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция ... С. 120.

(33) Рыбников Н.А. Крестьянский ребенок. Очерки по педологии крестьянского ребенка. С. 57.

変化をはっきりと示していた。何よりもまずこの問題についての説明を与えたのは、質問を受けた農民の子どものおよそ3.7パーセントである。⁽³⁴⁾ 児童学者たちは、農民の状況の改善を政治的な諸契機^{モメント}によって理由づける子どもの記述の中に、次の3つの基本的主題^{モチーフ}を指摘した。1) 自由 (随意性) ^{スヴァボード ヴォーリヤ} [* 訳注]、2) 権利 (様々な政治的権利と特権)、3) 権力、である。

[* 訳注] ロシア語の「スヴァボード (свобода)」と「ヴォーリヤ (воля)」はいずれも「自由」と訳されるが、前者は外的束縛から脱して達成された「自由」を、後者は意志や願望が実現される状態としての「自由」を指す (和田春樹『農民革命の世界 エセーニンとマフノ』東京大学出版会、1978年、261-263頁)。本訳稿では、両者が併記される場合のみ後者を「随意性」とした。

これらの回答の具体的な内容の検討は、研究者にとっていくつかの意外な成果をもたらした。まずそれらは、調査の対象となった都市と農村の子どものおよそ40パーセントが、「十月」の主要な達成の1つを「それが広範な人民大衆のために伴ってきた解放」であるとみなしていたことをはっきりさせた。ここでの自由^{スヴァボード}は、子どもたちによって様々に解釈されていた。都市と農村の子どもたちのおよそ20パーセントは自由について一般的に語り、この現象を何らかの抽象的な束縛、重圧、抑圧からの全人民的、全人類的な解放と把握していた。「ソヴィエト権力は自由^{スヴァボード}を与えた」、「ソヴィエト権力は解放をもたらした」、「ソヴィエト権力は自由^{ヴォーリヤ}を与えた」、「ソヴィエト権力は全人民を解放した」⁽³⁵⁾。

農村の子どもたちは、農民は「自由になった (стало вольными)」と回答したが、それに際して、この自由^{ヴォーリヤ}がどのように理解されているのかについてははっきりさせなかった。「彼 (農民) は今や自由^{ヴォーリヤ}なので、より良くなっている」、「我々は自由^{ヴォーリヤ}だから」、「ソヴィエト権力は完全な自由^{ヴォーリヤ}を与えた」、「農民には随意性と自由^{スヴァボード}が与えられた」、「生活が自由^{ヴォーリヤ}だから」⁽³⁶⁾。児童学者は次のように強調した。子どもたちは、彼ら自身の意見では、ソヴィエト権力が農奴制を根絶したと考えていたとみなすべきことをはっきりと示している。従って、農民の子どもにおける「自由」の観念は農奴制からの解放を意味したのである。研究者たちが強調するように、多くのより年長の子どもやピオネールにおいてすら、ソヴィエト権力が「農奴制から解放した」との理解が存在していた。こうした状況は研究者を困惑させた。彼らは、農民の若年者のこのような見解に対して、「農奴制の廃止は主として農民人口に関わったことなので、農村学校がこの事実についてこれまで以上にしっかり教えるべきことは全く明白である」という点に釈明を見出した。しかし、「二重の」誤りは、1917年の十月革命と1861年の農奴制の廃止という2つの事件を混同しているということであり、児童学

(34) Рыбников Н.А. Крестьянский ребенок. Очерки по педологии крестьянского ребенка. С. 59.

(35) Бернштейн М.С. Что дала советская власть рабочему классу // Дети и Октябрьская революция … С. 57.

(36) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция … С. 121.

者たちは、子どもたちが両者の区別がつかなくなっていることから、「これらの事件の階級的性格の無理解」という大問題を確認した。「農民は農奴制のくびきから解放されたというよりも、土地への緊縛から解放されたにすぎないのだから、いわゆる農奴制の廃止を偉大なる解放を実現した『十月』と混同し、1861年の歴史的行為を不当にも実際の農民の解放だとすることは許しがたい」のであった。⁽³⁷⁾ 児童学者たちは、1861年の事件と1917年の十月革命という事件を教える上で、教員への方法上の支援を行うべく動くことを助言した。児童学者たちは、二月革命と十月革命の特性を混同している子どもたちもこれに加えて、学校が若年者の理解を正すために相当の活動を行う、あるいは子どもたちに正しい「プロレタリア的・共産主義的方針」を与えるためにひと働きする必要について認めるべきだとした。⁽³⁸⁾

政治的諸権利と自由の問題に対する回答においては、農民の子どもたちがそれらについて、「自由」(「随意性」)^{スヴァボード ヴォーリヤ}のカテゴリーで論じていることが明らかになった。「ツァーリの下では自由がなかったが、今や諸々の自由権がある」^{スヴァボードノエ・ブラヴァー}、「ソヴィエト権力は彼らに自由権を与えた」⁽³⁹⁾。農民の子どもたちにとってとりわけ重要なものとして挙げられたのは、様々な社会的・国家的選出制の機関への代表権であった。この権利は、選挙権という形態で具体化されていた。「農民はどこでも選挙権を持っている」。「農民は会合や選挙で自分の持ち分の場所(полос)を持っている」⁽⁴⁰⁾。研究者たちに大いに好印象を与えたのは、子どもの1人の次のような記述である。「今や新しい体制(новоправие)となった」。「権利」のカテゴリーに属する子どもの記述、とりわけ選挙権や国の社会的・政治的活動への農民の参加について述べた部分は、「権力」のカテゴリーに属する記述と隣接していた。研究者たちは、「権利」の観念から「権力」の観念へのある種の「移行」のようなものを感知した。「彼は中央執行委員会に入ることができ(すなわち、中央執行委員会へと選出される権利を持っており)、権力の座につくことができる」⁽⁴¹⁾。しかしながら児童学者たちの意見によれば、「ソヴィエト権力のプロレタリア的、労働者的性格がなおざりにされ、曖昧になっているので」、この問題において農民の子どもたちは、新しい社会における自らの「階級的位^{モナーフ}置」を理解していないのであった。例えば、幾人かの子どもたちは、「全ての権力は農民たちの手にある」と率直に述べた。⁽⁴²⁾

児童学者たちによって分析された、子どもの回答の社会的・権利的主題の3つのカテゴリー(自

(37) Бернштейн М.С. Что дала советская власть рабочему классу // Дети и Октябрьская революция … С. 59–60.

(38) Бернштейн М.С. Что дала советская власть рабочему классу // Дети и Октябрьская революция … С. 59–60.

(39) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция … С. 123.

(40) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция … С. 125.

(41) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция … С. 126.

由、権利、権力)のうち、第1のものが最も多くの場所を占めた(2305名、全被験者の38パーセント)。回答内の割合では、「自由」(ないし「随意性」)の категорияが「土地」の категорияに次いで第2位を占めた。従って、「土地」と「自由」という古くからの農民的主题が、ソヴィエト権力下における農民の状況についての1920年代末の子どもたちの見解の中でも圧倒的だったということになる。児童学者の観察によれば、1件の回答における「土地」と「自由」という主题の並存も、他の、諸々の主题の組み合わせよりも頻繁に目にしたという——単独(「自由」のみ)で、「土地」という categoriaに追加されて、総じて様々な他の主题とありとあらゆる形で結び付いて、「自由」という契機は都市よりも農村の子どもたちにおいて頻繁に現れたのである。⁽⁴³⁾

農村の子どもたちは、ソヴィエト権力の政治的結果についての評価に比べると農村の文化的発展に関する評価をはるかに稀にしか与えていない。農村の生活様式と文化における構造変化について論述したのは、農村の子どものわずか1パーセントのみである。⁽⁴⁴⁾ そのような回答の内訳について児童学者たちは、生活様式とはかなり「保守的で動きが遅く、極度の困難と非常に長い時間をもって変化を被るような」現象であると説明した。彼らは、「十月」の経済的成果と政治的獲得物はまさに革命の最初の年から口に上り、現実味のあるものとして、子どもにすらかかりやすい形態を与えられたが、新しい生活様式にまつわる諸事象は、生活、とりわけ農民人口の生活に対してはきわめてゆっくりとしか浸透しなかった、と力説した。⁽⁴⁵⁾ 生活様式上の諸契機については、子どもたちは、衣服と食べ物について(「彼らは人並みに服を着て、靴を履く——子どもも自分も」,「今やより良い身なりをして、より良い食事をするようになった」,「より良い生活をし、より良いものを食べている」,「いくつかの村には公共食堂がある」),住居について(「今や、かつて住んでいたようなひどい家屋には住んでいない」,「農民たちは地主の家に移った」,「良い家屋を持つようになっていく」,「大きくはないが、より立派な家を建てた」)評価を行った。もちろん農民の子どもは、都市的な集団の理解からすれば、住居の改善についてかなりユニークな書き方をした。例えば彼らにとって、今後居住部分で家畜を飼わなくて良いということは著しい改善に思われた。「彼らには清潔な家があり、家畜のは別だ」。⁽⁴⁶⁾

宗教に関しては、児童学者たちはその影響力の弱まりを明らかにした。農村の若年者のほぼ半数が自身を無神論者に数えたが、その場合、女子よりも男子の方がはるかに多かった(少年の60パー

(42) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция ... С. 127.

(43) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция ... С. 128–129.

(44) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция ... С. 134.

(45) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция ... С. 134.

(46) Гельмонт А.М. Советская власть и крестьянство в представлении детей // Дети и Октябрьская революция ... С. 135.

セント、少女の41パーセント)。より上の年齢層では、「無神論者」は特に多くなった——16歳では88パーセントにも上った。⁽⁴⁷⁾

このように、1920年代末のソヴィエト権力についての農村の若年者の経済的・社会政治的理解は、経済、政治、生活様式の連続的・継起的評価によって成り立っていた。

児童学者たちの意見によれば、1917年の革命以降に生じた若年者の社会的相貌の変化は、子どもたちの理想においてとりわけ明瞭に現れていた。それぞれの時代は、時代の特性、理想の担い手の特質、自らの理想についてその代表者が語る階級的独自性によって変化するような独自の理想を持つ、とルィブニコフは書いた。農民的な類型の基本的な特質——実用性、現実主義、夢想しないこと（бедность фантазии）——は、農村の若年者の理想として語られている。⁽⁴⁸⁾

児童学者たちが明らかにしたように、原則として農村の若年者たちは、革命の前も後も、自身の周辺の人々から理想像を選んだ。1913年にはそのような農村の子どもは55パーセントであったが、1928年には46パーセントであった。1928年に農民の子どもたちは、理想としてまず知人（20.9パーセント）、地方活動家（20.3パーセント）、肉親（7.2パーセント）を挙げた。肉親で最も頻繁に挙げられたのは、父親と母親であった。なぜ肉親が残余のカテゴリーよりも農村の若年者の理想となることが少ないかを論じつつ、ルィブニコフは、彼らの労働実践と日常生活が若年者の目の前で行われ、若年者自身もかなり迅速に作業に加わり、それを習得することを指摘した。このこと全てが、模範とすべき理想として肉親を挙げる誘因の欠如へとつながるのである。ゆえに農村の若年者たちは、模範とすべき理想として、まず何よりも農村教師を挙げた（およそ11パーセント）。このアンケートでは、医師（2パーセント）、農業技術者（2パーセント）、女性裁縫職人（1パーセント）、靴職人（1パーセント）、等々も言及されている。⁽⁴⁹⁾ ルィブニコフの意見によれば、農村の子どもたちの回答は彼らの視野の狭さを示している。とは言え、教師や医者、農業技術者が理想の中に現れたことは、教育水準の向上の願望について証言してもいる。

より年長の子どもたちは、自身の理想の中にしばしば全連邦レヴェルの活動家を挙げた。ルィブニコフが指摘したように、この際、^{いにしえ}古のロシアからの名前（1913年の調査ではあったような、プーシキン、ロモノーソフ、トルストイ、ツァーリなど）が現れることは稀であった。1928年の調査で子どもたちが理想として挙げた名前は、レーニン（23.6パーセント）、カリーニン（1.2パーセント）、ルィコフ（0.9パーセント）、クルプスカヤ（0.8パーセント）、ヴォロシーロフ（0.7パーセント）、プーシキン

(47) Рыбников Н.А. Крестьянский ребенок. Очерки по педологии крестьянского ребенка. С. 59.

(48) Рыбников Н.А. Крестьянский ребенок. Очерки по педологии крестьянского ребенка. С. 63.

(49) Рыбников Н.А. Крестьянский ребенок. Очерки по педологии крестьянского ребенка. С. 64–65.

(0.7パーセント)、K・マルクス (0.7パーセント)、ルナチャルスキー (0.5パーセント) であった。この他、1928年に理想の中に挙がったのは、スチェパン・ラージン、M・フルンゼ、メンデレーエフ、R・ルクセンブルク、ジノヴィエフ、ダグラス・フェアバンクス、クラシン、ハリー・ピール、メアリー・ピックフォード、クララ・ツェトキンなどである。「ツァーリ」を理想として挙げた若年者は1人もいなかった。⁽⁵⁰⁾

ヴォログダ州グリャゾヴェツ地区スロボダ村の女性教師の家族文書に保存されている、児童学者のアンケートの設問に対する回答の事例を引いてみよう。この村はかなり人口が多く、ヴォログダからモスクワへと向かう道（街道、鉄道が並走している）沿いの小さな地区市グリャゾヴェツのそばに位置した。経済的にも文化的にもかなり発展した村だった。1920年代末に児童学者たちは、スロボダ村の子どもたちにおよそ次のような一連の質問を課した。「誰になりたいか？ 誰のようになりたいか、そしてそれはなぜか？ 欲しいものとその理由は？ 今何になりたいか？ 君はどのような活動が好きか？」。

少女，11歳，中農の娘

「私は将来教師になることを希望します。なぜなら教師になりたいからです。私はロシア人らしくなりたいです。なぜならこの人々は慎ましく、美しいからです。私はもっと靴が欲しいです。なぜなら足には靴が必要で、裸足で歩くわけにはいかないからです。私はレーニンについてもっと本を読みたいです。なぜなら彼は全世界の労働者と農民の教師であり、領袖ヴォーシチだからです。私は書くことが好きです。なぜなら学者になりたいからです。」

少年，11歳，農民，中農

「僕は農業技術者になりたいです。僕は同志カリーンのようになりたいです。なぜなら彼は立派クラシーヴィだからです。僕が何よりも欲しいものはお金です。なぜならそれで何でも買えるからです。僕は何よりもけものについての本を読むことが好きです。なぜならそれらがどのような生態をし、それらをどのようにして捕まえるべきか〔がわかる〕からです。僕は何よりも農作業、刈ることが好きです。」

少女，農民，中農

「私は管理人（прикащица）になりたいです。なぜなら学業を終えたからです。アレクサンドルおじさんみたいに。なぜなら彼は良い労働者だからです。私は何よりも欲しいものはお金です。なぜならそれで何かと多くのものを買えるからです。私は何よりもレーニンについて読むのが好きです。なぜなら彼について多くの人が何かかにか書いているからです。私は家の周りを掃くのが好きです。なぜなら暖かい時分には掃くのはとても気持ち良いからです。もし私

(50) Там же.

がお金を見つけたら、家に持って帰って、このお金で街に行き、そこで服やコートを買うので
すが。⁽⁵¹⁾」]

農民の子どもたちの新しい諸々の理想について論じ続けながら、児童学者たちは、それらの中に時代性がとりわけ顕著に反映されていることを指摘している。ここでは若年者の年齢が進むほどその視野は広くなり、そのことは歴史や文学作品上の英雄についてのより良い理解がなされていることに現れていた。しかしながら農村の児童たちの世界観においては、政治的指導者たちの方が文学作品上の理想よりも重きをなしていた。

将来の職業について論ずる中で、農村の児童たちは、原則として、肉体的な手作業労働と関わりのある職業へと傾斜していた。ここでは、1913年でも1928年でも子どもたちは、農作業からそれ以外へと転身することを夢見ていた。最も多くの子どもたちが挙げたのは、教師という職業である(39パーセント)。少女はより頻繁に女性裁縫職人^{ゴルトニーク}という職業を挙げ(24パーセント)、少年は靴職人を挙げた(7.4パーセント)。桶職人^{スリエーサリ}、金属細工師、農業技術者、医者、運転手、機関士、鍛冶工、ソーセージ製造職人、自動車運転手なども挙げられていた。⁽⁵²⁾

20世紀の第1三半期に児童学者たちによって収集され分析された極めて豊富な資料は、社会的改造の中心的対象の1つであった農村の子どもたちの社会的転形の深部を我々が覗き見ることを可能にする。ソヴィエト国家によって作成されたイデオロギー的路線を徹底して遂行しつつ、彼らの世界観の形成に基本的な役割を為したのは学校と教師であった。既に1920年代の末において、基本的に革命前かその直後に生まれた(1912-1920年生まれ)の子どもたちは、ソヴィエト権力の利点、その経済的・政治的獲得物、理想、シンボルについてのイデオロギー的基本概念をしっかりと身につけていた。同時に児童学者たちの研究は、1920年代末の農村の子どもたちの意識において基本的な農民的祖型(архетипы)が保持されていると結論することを可能ならしめる——自らの世界観の基礎として彼らは、100年前と同じように、「土地と自由」^{ゼムリヤー・イ・ヴォーリヤ}を唱えたのである。第二次大戦前(国内人口の圧倒的部分が農村に住み、農民、より後にはコルホーズ員であった)のソヴィエト人の基本的世界観となったこの奇妙な合成体は、「ソヴィエト人」という現象の基底にあるものであった。確信をもって言うことができるのは、1917-1920年にソヴィエト国家は、来るべき戦いに向けて「新しい人間」を養成するという面で、新政権にとって極めて重要で不可欠な前進を遂げたのであり、そのような戦いで直近のものは大祖国戦争であったが、そこで戦った世代を構成していたのは、新しいソヴィエト的理想を持った1920年代の児童たちだったということである。

(51) Личный архив Ряжевой Н.А., учительницы Слободской школы Грязовецкого района Вологодской области. Сохранены орфография и пунктуация источника.

(52) Рыбников Н.А. Крестьянский ребенок. Очерки по педологии крестьянского ребенка. С. 67.

参 考 文 献

- Bernshtein S.M. Chto dala sovetskaia vlast' rabochemu klassu // Deti i Oktiabr'skaia revoliutsiia. Ideologiia sovetskogo shkol'nika / pod red. V.N. Shul'gina. M., 1928.
- Dekret VTsIK o Edinoi trudovoi shkole RSFSR // Izvestiia VTsIK. 1918. 16 oktiabria. № 225.
- Deti i Oktiabr'skaia revoliutsiia. Ideologiia sovetskogo shkol'nika / pod red. V.N. Shul'gina. M., 1928.
- Gastev A. Novaia kul'turnaia ustanovka. M., 1923.
- Gel'mont A.M. Sovetskaia vlast' i krest'ianstvo v predstavlenii detei // Deti i Oktiabr'skaia revoliutsiia. Ideologiia sovetskogo shkol'nika / pod red. V.N. Shul'gina. M., 1928.
- Gol'tsman A. Reorganizatsiia cheloveka. M., 1924.
- Golitsyn. Rezul'taty ankety o detskikh idealakh uchenikov vtoroi gruppy nachal'noi zemskoi sel'skoi shkoli Riazanskoii gubernii // Vestnik Riazanskogo gubernskogo zemstva. 1913. № 7–8.
- Gump E.H. Obrazovanie i gramotnost' v glubine Rossii. Voronezhskaia guberniia 1885–1897 gg. // Mentalitet i agrarnoe razvitie Rossii (19–20 vv.). M., 1996.
- Kerzhentsev P.M. K novoi kul'ture. Peterburg, 1921.
- Krasovitskaia T. Iu. Rossiiskoe obrazovanie mezhdru reformatorstvom i revoliutsionarizmom. Fevral' 1917–1920 god. M., 2002.
- Krupskaia N.K. O kommunisticheskom vospitanii shkol'nikov. M., 1987.
- Lunacharskii A.V. Zadachi prosveshcheniia v sisteme sovetskogo stroitel'stva. Doklad na I Vsesoiuznom Uchitel'skom s'ezde. M., 1925.
- Narodnoe khoziaistvo SSSR. Stat. spravochnik. M., L., 1932.
- Nasha rabota po izucheniiu ideologii sovremennogo shkol'nika (cel', ob'em i metod raboty) // Deti i Oktiabr'skaia revoliutsiia. Ideologiia sovetskogo shkol'nika / pod red. V.N. Shul'gina. M., 1928.
- Novye programmy 1,2,3 i 4 godov obucheniia shkol 1 stupeni. Velikii Ustiug, 1925.
- Postanovlenie TsK VKP (b) «O pedagogicheskikh izvrashcheniakh v sisteme Narkomprosa» // Pravda. 1936. 5 iiulia.
- Programma RKP (b) 1919 g. M., 1924.
- Rakunov V.A. Gosudarstvennaia politika v sfere shkol'nogo obrazovaniia v 1920–30-kh godakh // Informatsionnyi gumanitarnyi portal «Znanie. Ponimanie. Umenie». 2011. № 1 (ianvar'-fevral').
- Rashin A.G. Naselenie Rossii za 100 let (1813–1913). Statisticheskie ocherki. M., 1956.
- Rybnikov N.A. Ideologiia sovetskogo shkol'nika // Pedologiia. 1928. № 1.
- Rybnikov N.A. Krest'ianskii rebenok. Ocherki po pedagogii krest'ianskogo rebenka. M., 1930.
- Rybnikov N.A. Nasha rabota po izucheniiu ideologii sovremennogo shkol'nika // Deti i Oktiabr'skaia revoliutsiia. Ideologiia sovetskogo shkol'nika / pod red. V.N. Shul'gina. M., 1928.
- Ustav edinoi trudovoi shkoly // Izvestiia VTsIK. 1923. 28 fevralia. № 296.

要旨: 本論文は、ソ連の最初の 10 年において新たなイデオロギーの影響下に形成された、農民の子どもたちの世界観についての研究である。1910–1917 年に生まれた農民の子どもたちは新しい価値観を習得したが、なおも心の中に基本的な「農民の祖型」を保持しており、それは、「土地と自由」という旧き理想に基づいていた。概念と価値観とのそのような結び付きは、1930–1940 年代のソヴィエト人民の世界観の根源的な部分となったのである。

キーワード: ロシア, ソヴィエト期, イデオロギー, 社会的転換